

古代史マニアのひまつぶし
第5回 福岡市内から出土した瓦経

徳永 隆司

河村哲夫先生への追悼

河村哲夫先生のご冥福をお祈り申し上げます。

このシリーズも先生に叱咤激励されながら続けることができていたところです。表題にあるように「古代史マニアのひまつぶし」でひまな時には課題捜しと資料集めをやってきました。それなりに暇をつぶすことができていたのに、残念でたまりません。そのことと、やさしい先生の笑顔に会えないことで、ポツカリ心の中に穴が空いてしまいました。私は持病のため、先生主催の歴史旅行に参加することができませんでしたが、十年近く受講を続け、昨年からは季刊「ふくおか・アジア」へ投稿させて頂けるようになり、益々親しくお付き合いできるようになってきたところでした。その意味でも先生のご逝去は残念でたまりません。今後、可能な限り先生の博学さとすばらしい御性格を語り継いでいこうと思います。

1. 瓦経とは

平安時代の永承7年(1052)年、戦いや疫病の多発により、仏法が廃れ釈尊の教えのみが残り、悟りをえることができない末法の世に入ったと考えられた。そこで、末法の世の到来したこの時代に、釈迦入滅の後56億7千万年後に釈迦に代わって、この世を救うために弥勒菩薩が現れるまで、經典や仏具を伝え、法華經などを紙に書いて經筒に収めて、地下に埋納する經塚(写真1)が盛んに作られるようになった。しかし、紙本經は朽ちやすいため、經典を不朽なものとするために、粘土板に經を刻み焼き締め(瓦経)、經塚に埋納することが行われた。經塚遺跡は全国に約2000ヶ所造られたが、ほとんどが紙本の經典を埋納したもので、瓦経を埋納した經塚は約40ヶ所であり、分布の中心は西日本である。

瓦経の内容は法華經、無量義經、觀普賢經、仁王經、般若心經、阿弥陀經で、さまざまな副納品とともに經塚に埋納された。焼き物である瓦経は保存状態が比較的良く、製作や埋納に携わった人々の情報が得られ易いため、考古資料として貴重となっており、瓦経片を含めて考古学資料として、さかんに、研究されている。

瓦経を埋納する經塚は一般的に山頂部や丘陵地の高所に作られることが多く、埋納からほぼ千年が経過しているので、偶然の機会に発見されることが多い。經塚は最初に縦方向に穴を掘り、次に横方向に穴を掘って、その横穴に經典をいれた經筒(写真2)を納める。さらに、經筒はそれを保護するために陶器(写真2)に納められていることが多い。經筒は銅製が主流であるが、陶製もあり、その他の同時埋蔵物として小刀や鏡などもある。

末法の思想は庶民の間から始まるが、最終的には最上流に波及し、藤原道長や白河院も經塚を作ることになる。彼らの埋納物は紙製の經典で、両者の經塚は平安時代に信仰が厚かった金峰山に作られている。



写真1 松岡経塚遺跡



写真2 伊豆山経塚の埋納物

2. 飯盛山出土の瓦経

飯盛山は福岡市西区の早良平野にそびえる標高382mの山である（写真3）。平野側から見ると、きれいな三角形をしており、昔から信仰の対象となってきた。

東側の山裾には、弥生時代中期の遺跡で、一つの甕棺から鏡、剣、勾玉（三種の神器）が日本で初めて見つかった吉武高木遺跡（国指定史跡）がある。また、山頂を上宮とする飯盛神社があり、古くから早良平野の鎮守の神として栄えてきた。戦国期には山頂に飯盛山城が築かれた。

大正13年（1924）、福岡市西区飯盛山で「雨乞いの行事」の際に偶然に瓦経が発見された。その発見場所の記念碑を写真4に示す。また、ほり出された瓦経の写真を写真5に示す。法華経の一部が刻まれており、経文の字詰めから判断して、当初は二百余枚で一具を形成していたと思われた。永久二年（1114）の紀年銘があり、この年が飯盛山経塚の造営時期とされている。

瓦経発見場所は自然石を積んだ直径1メートルほどの石囲いの中に、瓦経を縦に重ねて埋納されていた。瓦の表裏の両面に17字詰め10行で、1字、1字丁寧に刻書された瓦経が塚内に納められていた。発見された瓦経は発掘当初から関係者で分けられ、現在、九州歴史資料館、飯盛神社、福岡市博物館、大宰府天満宮、九州大学、黒川古文化研究所、東京、京都、奈良各国立博物館、福岡県立糸島高校などに分蔵されている。



写真3 飯盛山遠景



写真4 山頂に建てられている碑

飯盛山の瓦経は江戸時代、明治 20～24 年、大正 13 年の数回にわたって出土しており、前述した大正 13 年の事例が最も多量で、400 点以上が出土したと記録されている。

飯盛山出土の瓦経は妙法蓮華経が主体であり、作られた時代は延久 3 年から承安 4 年までの約百年間である。これまでに確認された瓦経は妙法蓮華経 206 枚、無量義経 24 枚、観普賢経 21 枚、仁王経 39 枚、阿弥陀経 6 枚、般若心経 1 枚の計 297 枚である。製作年紀として永久 2 年（1114）と刻まれたものもある。



写真 5 飯盛山出土の瓦経

3. 愛宕山出土の瓦経

愛宕山（写真 6）は福岡市西区と早良区の境界を流れる室見川の博多湾への流入部にあり、山頂には西暦 300 年代（十二代景行天皇時代）に創建され、福岡県では最も古い歴史をもつ「愛宕神社」がある。

貝原益軒は著書「筑前國続風土記」に愛宕山について「正保慶安のころまでは城の古瓦多く残れり、その瓦に法華経の文字焼き付けてありしかは、人ことごとく取りて、今はその瓦なくなりぬ」と記述している。

この文に目を付けた郷土史家の高野孤鹿氏は昭和 30 年頃から愛宕山の瓦経の発掘を試みた。その結果、城跡の東斜面、愛宕 3 丁目の谷筋で瓦経の断片の発掘に成功した。採取地は写真 7 の右上部の×印の場所である。

その他に地域住人が過去に採取したものを含めると、採取数は 38 片であった。写真 8 に瓦経片の拓本を、また写真 9 に瓦経片の状況を示す。



写真 6 愛宕山の正面口

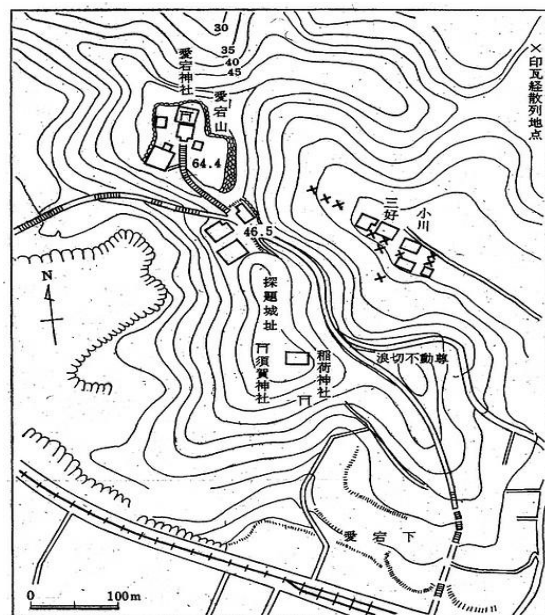


写真 7 瓦経片の発掘場所

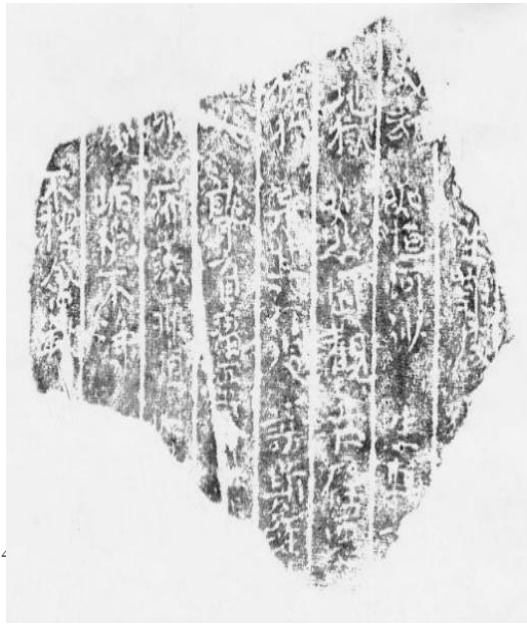


写真8 瓦経片の拓本



写真9 瓦経の状況

4. 箱崎宮出土の瓦経

箱崎宮（写真 10）は延長元年（923）に建立され、宇佐、石清水と並び日本三大八幡宮の一つとされている。1 月には玉取祭（玉せせり）、9 月には放生会が執り行われ、これらの行事とともに熱い信仰を受けている。

箱崎宮の瓦経は 1989（平成元）年に箱崎宮の境内南西部で工事中に偶然発見された。出土状況は、瓦経の小口を上にして、14 枚と五枚を縦に重ね、2 列



写真 10 箱崎宮

に並べて 36 枚が埋納されていた。縦 23 cm、横 18.5 cm、厚さ 1.7 cm 前後の粘土板の裏表に、罫線を引き、10 行 17 字詰めを基本として経文を記しており、般若心経、仁王経が彫られていた。大きさは 飯盛山瓦経とほぼ同じで、全体の作りも似ていることから、ほぼ同時期のものとみられる。焼成後に、墨で誤字脱字を校正している箇所がある。

1989 年に出土した瓦経は写真 11、12 のように経が鮮明に残っており、福岡市博物館で見ることができる。



写真 11 箱崎宮出土の瓦経



写真 12 拡大写真（仁王般若波羅蜜經）